

表現型とアスペクト

青 山 文 啓

0. はじめに 戦後、「国語動詞の一分類」(金田一春彦:1950)が発表されなかったとしたら、日本語のアスペクト研究が今日ほど活況を呈したかどうか疑しい。この論文の後に続く研究者も何人か現われ、四分の一世紀を経て、その内の主なものが一冊の論集にまとめられた。これが『日本語動詞のアスペクト』(金田一編:1976)である。

この論集は、五人の研究者による七編の論文から成る。その七編の内訳や論集の出版元、さらに高橋太郎執筆による「解説」が末尾に付けられていることなどから、日本語のアスペクトの研究は実質的には『言語学研究会』に受け継がれたと考えてもよいだろう。この図式がそれほどの外れなものでないことは、論集が日本語のアスペクトに興味を示す人々に浸透したところを見計らって、矢継ぎ早に『言語学研究会』の奥田靖雄(1977; 78 a, b)からきびしい口調の批判が寄せられたことでわかる。私の理解に誤りがないとすれば、その主張は次の三点にまとめることができる。

- (1) a. ーテイルとールを対立項として認める。
- b. この対立項を持ったものを、継続動詞/結果動詞に二分する; その場合の規準は、それぞれ「主体の動作」「主体の変化」である¹⁾。
- c. 時、場所、状態などの副詞句と連繫させた研究の重要性を指摘。

これら三点は、その性格から二つに分類することができる:(1a)と(1b, c)である。一方の(1a)はある文節が決められた位置に立つ場合の、いくつかの可能性を問題にしている。他方、(1b, c)で問題にされているのは、ある文節と別の文節との組み合わせである。つまり、(1b)では名詞句と動詞句との組み合わせであるし、(1c)では副詞句と動詞句との組み合わせが問題なのである。

以上のことから、(1a)は「対立」という paradigmatic な関係に着目した手続きであり、(1b, c)は「共起」という syntagmatic な関係に着目した手続きと考えてよいだろう。また、(1a)を形態論レベルの手続き、(1b, c)を構文論レベルの手続きと見ると、この場合は可能だろう。

ところで、奥田靖雄のアスペクト論で優先されている手続きは(1a)の方である。従って、先ず形態論的なレベルで対立が見つかる動詞句だけに焦点を絞る、その後構文論的レベルの共起現象に眼を向けることになる。小論で試みようとする立場は、これとは逆の手順を踏む:つまり(1b, c)の構文論レベルから分析を始めて枠組を提示してから、その枠組に形態論レベルの対立を重ね合わせる。

小論では、陳述、程度、状態などの各副詞句や、複合動詞句、助動詞(タ、ウ、ダロウ

など)については考えない。また、連体修飾や複文の場合も対象外とする。結局、(2)に示す三種の関係が小論で扱う範囲に入る。

- (2) a. 副詞句とそれ以外として一まとめにされた文の成分との共起関係：つまり、副詞句が現われるかどうか；現われる場合はどんな種類の副詞句か。
- b. 副詞句以外として一まとめにされた文の成分の内、述語文節に現われるものの形態論的対立。
- c. 副詞句以外として一まとめにされた文の成分の内、名詞句と、述語文節に現われるものの語幹部分（以下、略して用言）との共起関係。

(2a, b)については、順に説明を加える。(2c)については、ここで充分に分析する余裕がない。そこで、この種の共起関係については調査が整っていると仮定し、その意味的側面にだけ注目する。以前からアスペクトの意味の実現と自他対応の意味の側面との間には、何らかの関係があるのではないかといわれてきた。ここでは<名詞句+用言> (N+Vと略す)の連鎖を媒介にして両者の関係を探る。従って、これまでの動詞分類という枠を越えて、表現型としての分類を目指しているわけである。

次の二点を前提として話を進める。

- (3) a. 分類は階層を成す。以下に示した分類は小論の範囲内で関係するものだけである。それ以上の下位分類を否定しているわけではない。
- b. 二つの異なった分類規準を使えば、分類されて出てくるもの（被分類項）にも二つある。この場合、規準間の関係、被分類項間の関係はいろいろである。従って、規準同士、被分類項同士、そして規準と被分類項の三者の区別は明確にする必要がある。ここでは、従来のような命名の仕方（例：継続相と継続動詞）ではなくそれぞれに別々の名称を与える。

以下の三節で、アスペクトによる表現型分類のための手順について述べる。そこで出てくる問題点と解決法について第四節で扱う。分類されることを拒否するような中間的な問題については、第五節で述べる。

1. 総称と非総称 私たちは、「犬」という名詞句を使って、「犬」一般を指すこともできれば、眼前の「犬」を指すこともできる。つまり名詞句の指すものにある種類の区別が存在する。この区別を、仮に、総称と非総称と呼ぶ²⁾。表現全体へ類推を及ぼしてこの区別を見つけることができる。

- (4) a. クジラは哺乳類だ。
- b. 象は鼻が長い。
- c. 油は水に浮く。
- d. 木星は約十一・九年で太陽を回る。
- e. 彼女は毎週火曜にその喫茶店に行く。
- f. 彼は筑波大に行っている。
- g. 彼は筑波大生です。
- h. 木下君はやせている³⁾。
- i. ウチの夫は料理ができます。

- j. 小生は母方に十一人のイトコがおります。
 - k. この論文は厚さが一ミリある
 - l. その旗は三角形の形をしている。
- (5)
- a. 明日、運動会がある。
 - b. 明日、その紙が要る。
 - c. 明日は暇です。
 - d. 天気予報によると明日は雨だ。
 - e. 机の上にタイプライターがある。
 - f. 屋上に彼女がいる。
 - g. 斎藤君は部屋で論文を書いている。
 - h. 彼は運動場を走っている。
 - i. 三浦氏は姿をかくしている。
 - j. 彼女はカゼをひいている。
 - k. 芝居は終わっている。
 - l. 財布を四つなくしている。

(4) が総称, (5) が非総称である。総称の特徴は頻度数を表わす副詞句を取らないことである。取ったとしても(4e)のように回帰的な頻度数を表わすものである。従って、物理的性質、習性、帰属関係などが、これらの表現によって意味される⁴⁾。もし(4)が非回帰的な頻度数の副詞句を取ってそれでも意味が成り立つ場合は、全て非総称に分類される(cf. 6b)。

- (6)
- a. 彼は週に一度筑波大に行っている。
 - b. 彼は生前に一度筑波大に行っている。

結局、(4f)のままでは総称と非総称の間で両義的なのだが、この区別が有効であることは(4f)と「彼はトイレに行っている」とを較べてみればわかる。後者は両義的ではないからだ。帰属関係を表わす場合の(4f)は(4g)とほぼ同義なのである。

総称の下位分類をさらに進める必要があるが、以下では非総称のものに限って話を進める。

2. 状態と過程 (5)の非総称のもの内、未来時を指す副詞句と共に起る表現型(5a, b, c, d)を除く。除いた後で見つかる対立が有効なものである。一方は一テイル対一の対立を持たない表現型であり、他方はこの対立を持つ表現型である。前者(5e, f)を状態、後者(5g, h, i, j, k, l)を過程と仮に呼ぶ。

- (5)
- e. 机の上にタイプライターがある。
 - f. 屋上に彼女がいる。
 - g. …論文を書いている／書く
 - h. …運動場を走っている／走る
 - i. …姿をかくしている／かくす
 - j. …カゼをひいている／ひく
 - k. 芝居は終わっている／終わる

1. 財布を…なくしている／なくす
 なぜ (5a, b, c, d) を最初に除いたかという久野暉 (1973, p.79) に見える (7) のような記述に対して反例となるからである。

(7) 動形詞 (小論の用言：青山) が現在形 (V-ル：青山) で用いられている場合には、次の事が言える。

a. [+状態的] 動形詞は、現在時の状態を指し…… (以下、略)

小論の状態は [+状態的] に等しい。確かに、(5a, b, c, d) も用言だけに注目すれば、一テイル対一ルの対立を持たないから状態に分類されるが、これらは現在時の状態を指してはいない。現在時の状態を指すかどうかは用言のタイプだけでは決まらなると考えてよさそうだ。<名詞句+用言>を基にして表現型の分類を探る利点はここにある。結局、未来時を指す副詞句と共に起する (5a, b, c, d) を除けば、(7) も有用になる。もっともこの四例では「眼前描写のガ」が現われないのに、(5e, f) ではそれが現われるという点は見逃せないだろう⁹⁾。

以下、過程に分類されたものに限って扱う。

3. 進行と結果 過程に分類された (5g, h, i, j, k, l) の表現型の中で、一テイルを伴っているものに着目する。上の二節で範囲をせばめてきた結果一テイルの取る意味は限られている。ここでも二つのグループが区別される：(8) は進行か結果で両義的なもの、(9) は結果だけを意味するものである。

(8) a. 斎藤君は部屋で論文を書いている。

b. 彼は運動場を走っている。

(9) a. 三浦氏は姿をかくしている⁹⁾。

b. 彼女はカゼをひいている。

c. 芝居は終わっている。

d. 財布を四つなくしている。

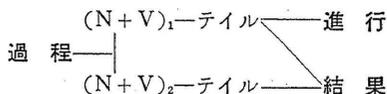
e. 彼は生前に一度筑波大に行っている。

(8) に入る (5g, h), (9) には (5i, j, k, l) と (6b) が入って二分される。(9e) が以前の (6b) だが、それは非総称でさらに、一テイル対一ルの対立を持つため過程に分類されるからである⁷⁾。

(8a, b) では、それぞれ「部屋で」「運動場を」という場所を表わす名詞句と共に起すが、例えば (9e) のように結果の場合、場所が現われるとしても「筑波大に」のように方向を指し示すものである。また、(8b) の「走る」と (9e) の「行く」はそれぞれのグループに特徴的な運動の動詞である (cf. 奥田：1977)。

(8) の表現型を $(N+V)_1$ で、(9) の表現型を $(N+V)_2$ で表わすと、それらが一テイルを伴った場合に現われる進行と結果の意味は、(10) のような関係として図示される。

(10)

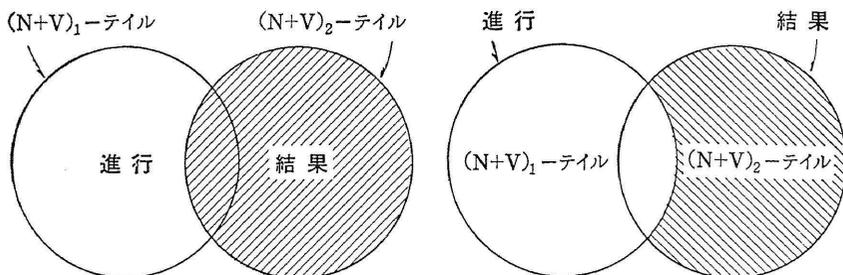


(10) から、進行の意味が特殊（有標的）なものだということがわかる。 $(N+V)_2$ -テイルが進行の意味を取るようにはみえる場合があるが、その問題については後に触れる。

(10) をヴェン図に移し変えるほうが事情はのみこみやすくなるが、これには方法が二つある。一方は、表現型の側から進行／結果の区別を眺める、他方、進行／結果の区別から表現型を眺めることもできる。それぞれ、(11 a)、(11 b) とする。

(11 a)

(11 b)



これまで述べてきたことからわかるように、小論では、表現型の側から眺める (11 a) の立場を取っている。

(11 a) に対して、(11 b) の方は、表現型を分類の対象としていることを除けば、金田一 (1950) 以降、奥田 (1977: 78 a, b) に至るまで主流を占めてきた考え方である。そして、「十字分類」(高橋: 1976, 金田一編, pp. 329 ff.) が問題になるのは正に (11 b) の場合なのだ。

どちらの見方を取るかは自由であるが、この場合も参考になるのは奥田 (1977; 78 a, b) の考え方である。彼は (11 b) の立場を受け継ぎながら、動詞分類を中心にしてアスペクト研究の方法を探っている。(1) に示したように、そこでは、三つのことが主張されていた。この内、彼の後半部の論点は (1 b) にある。小論で今問題にしていることも、この (1 b) に関連する。

(1 b) で述べられているのは、「主体の動作」「主体の変化」という規準を使って、一テイルとールを対立項として持つ動詞のグループを、継続動詞／結果動詞に二分することだった。この規準に「主体」が入っていることは、従来の動詞分類とは趣を異にしている。というのは、「主体」とは名詞句のことに他ならないからである。さらに「動作」「変化」が動詞句の特徴付けであることを考え合わせれば、(1 b) の主張は <名詞句+用言> を基に表現型として分類するという小論の立場に等しいものと考えていいはずである。残念なことは、この (1 b) が (11 b) と同じ方向の見方を取っているのに、分類のもう一つの可能性として (11 a) があることに触れられてない点だろう。

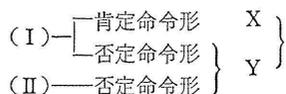
ところで、奥田の (1 b) の主張に類似した指摘は、彼もいうように、金田一 (1950) 以来、たびたびされてきた；つまり自他の区別がアスペクトの区別に対応しそうだという指摘である。この指摘と並んで、意志動詞もアスペクトに関連しているのではないかといわ

れてきた（金田一編：1976，例えば，13f.；116ff.；久野：1973，79ff.；さらに，三上：1953，104ff.）。いずれの指摘もそれらの間の相互関係を明らかにするような試みに巡りあわないまま時間が流れた。次の節では<名詞句+用言>という枠を使用してこれらの相互関連を考えてみることにしよう。相互関連を探ることから，(11a)の立場がより妥当だという証拠をあげることができるはずである。

4. 意志と自他の対 ここでいう意志とは従来「意志動詞」と呼ばれてきた動詞分類にはほぼ相当する。「意志動詞」を術語として用いないのは，ここでも<名詞句+用言>を基にしてそれを考えていくからである。いままで自他の対に関してはその形態論的側面にばかり関心が注がれてきたが，これに劣らず重要なのは，ある用言の語根に対して同一名詞句がガ格にもヲ格にも立つという事実である。というのは，全体からみれば多くないにしても自他相通（自他両用）の場合があるからだ。この場合，指標となるのはガ格にもヲ格にも立つ名詞句が同一かどうかという点だけである（例：風が生ずる；風を生ずる）⁹⁾。意志についてもこの点に注意しなければならないだろう。ここでは便宜上，命令形の可否をテストにして意志を抽出する。問題の性質上，ガ格に立つ名詞句は人間[human]に類するものを他動詞の場合には想定してある（[人]/主と略記）。

大雑把にいて，次の三種類を認めることができる：(I)肯定命令形，否定命令形とも特殊な文脈を必要としないもの，(II)否定命令形の方は問題ないが肯定命令形では文脈の制約がより強く働くもの，(III)肯定命令形，否定命令形ともできないもの⁹⁾。ここでは(I)，(II)だけを扱う。結果として(12)のような図式が生れる。肯定系列をX，否定系列をYとおいた。

(12)



次に例文をみる。(13)は他動詞，(14)は自動詞（可能形ではない）で対を成すものである。対のないものも対照のため二例(i, j)入れた。*は両義的なものである。

(13)	[人]/主	(I)	(II)	進行	結果
a. 服をかえる	+	+		+	+
b. 姿をかくす	+	+		(+)	+
c. 戸をしめる	+	+		(+)	+
d. *口紅をとる	+	+		+	+
e. 酒をまわす	+	+		+	+
f. 事故を起こす	+	(+)	+		+
g. 財布を落とす	+	(+)	+		+
h. ごはんを残す	+	(+)	+		+
i. カゼをひく	+	(+)	+		+
j. _____					

(14)	[人]/主	(I)	(II)	進行	結果
a. 服がかわる	(+)				+
b. 姿がかくれる	(+)				+
c. 戸がしまる				(+)	+
d. 口紅がとれる	(+)				+
e. *酒がまわる	(+)				+
f. 事故が起きる ¹⁰⁾					+
g. 財布が落ちる				(+)	+
h. ごはんが残る					+
i. _____					
j. 雪が降る				(+)	+

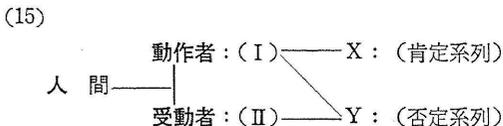
(14')	[人]/主	(I)	(II)	進行	結果
a. かわる	+	+		(+)	+
b. かくれる	+	+		(+)	+
c. しまる				(+)	+
d. とれる				(+)	+
e. まわる	+	+		+	+
f. 起きる	+	+		(+)	+
g. 落ちる	+	(+)	+	(+)	+
h. 残る	+	+		(+)	+
i. _____					
j. 降る					

各表の段ごとにもて、+が現われる場合はその特徴を持っている；何も現われない場合はその特徴がない；(+)は文脈の制約が強く働き判定に揺れが生ずるものである。

問題の<(名詞句+)
用言>が一テイルを伴った場合、進行/結果のどちらを表わすかについても右側の二段に表示した。

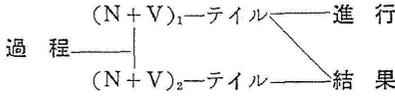
(14) では、(I)にも(II)にも+が分布しない；従って(III)の例と考えて、今回は対象からはずす。(14')は対象に入る。

ところで(I)、(II)から意志との関連で何を読み取るかについて参考となるのは、格文法の考え方である。格文法では、動作者(agent)の割り出しに命令形がテストに使われる。私たちが、命令形を使うがそこに肯定系列、否定系列の二分を認めたわけである。従って、一つの類推として次のように考えることができる。動作者と対を成すものを受動者(patient)と呼べば、(I)は動作者に、(II)は受動者とそれぞれ対応付けられる。この対応は(15)のように図示できる。



ところが、この(15)は先の(10)とシヤム双生児のように似ている。

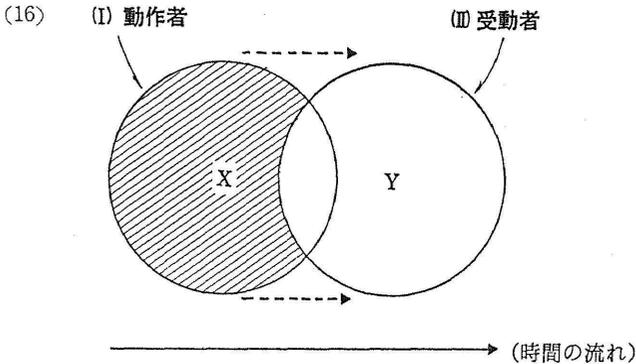
(10)



(15)と(10)を対照することから、いろいろな解釈が生まれる。ここではその内、小論との関連で最も重要なものに触れておきたい。それは、(I)動作者がXとYの二面性を持つ点についてである。(13 a) を例に取って考える。これは、動作者を取るが、注意したいのは一テイルを伴った場合、進行と結果の両方を意味するということだ。(15)と(10)の対比からも明らかのように、(I)の二面性は次のように対応しているのである。

(13 a) 服をかえている { 進行 : X
結果 : Y

(II)受動者がYの特徴だけで決められることを考えれば、動作者はいつでも受動者の側面を持っているのだと推測を発展させることができる。そしてこの動作者から受動者の移行を条件付けているのは、(13 a)にみるように進行/結果というアスペクトの区別なのだろう。こう考えていならば、進行中のみだけ動作者であったものは結果の相以降では受動者に変貌してしまうのだと結論付けられる。図示すると(16)のようになる。



この(16)は(11 a, b)に対応する。「十字分類」と呼ばれる現象を、私は以上のように捉えたい。ところで他動詞のガ格に立つ名詞句が常に動作者であるとは限らない。(13 f, g, h, i) のように受動者を取ることが普通の他動詞もあるが、ここでは詳しく触れない。

(15)と(10)が対応付けられるのは、名詞句が人間の場合で、さらにその名詞句を受け入れる表現型が過程である場合に限られることを、この節の締めくくりにあたって付け加える。

5. 眼前描写：場面の不確定性 場面とは話し手が自分の感覚器官をさらしてそこで起こる出来事を認識している空間である。「眼前描写のガ」(cf. 尾上：1973) は非総称の場合に現われることがある。それが現われる表現の解釈は正に場面そのものの中にあることも多い。

(17) a. きこのうの風で木がたおれている。

b. 風で木がたおれている。

(17 a, b) は両方ともガが現われる。これらは「眼前描写」と考えていいだろう。(17 a) では、風はきこのう吹いたのだから、眼前には、その前日まで立っていた木がたおれている。従って、何本の木がたおれていると(17 a) は結果の意味しかない。ところが(17 b) では結果の意味に加えて進行に近い意味も現われうる。前者の意味か後者の意味かは、その場面に立ち合っているものにしかわからない。(17 b) が後者の意味を実現するのは、「木」が複数の場合だという人があるかもしれない。確かにそういう場合も考えうるが、他にも可能性はある。例えば、一本の木であっても間近で木がメリメリと音をたてながらたおれる場合も、進行に近いはずだ。

この場合、重要なのは、話し手の感覚器官が場面に直結している——あるいは、そのように語られているという事実の方なのだ。こういう場合、多くは感情の高まった状況か緊迫した状況である。この種の状況で例外的に進行に近い意味が出るようだ。

今の段階では、表現型としての分類には「眼前描写」は特例扱いとすべきだと考えている。いずれにしても、眼前描写が場面論にとっては中心の問題を提起することは間違いない。

6. まとめ 次のことを主張してきた：(イ) <名詞句+用言>の連鎖を基にして分類を進める¹⁾；(ロ) 名詞句に総称と非総称の区別を認めるように、表現型としてもこの区別を認める；(ハ) <名詞句+用言>を媒介にしてアスペクトと、格文法で扱われる意味とが相関していることを明らかにした；(ニ) 表現型の分類には、「眼前描写」など専ら場面に関係するものは特例として扱う。

注

- 1) 彼の「連語論」が支えになっていると考えられる。cf. 奥田(1968-72:を格の名詞と動詞とのくみあわせ、『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28)
- 2) 佐久間鼎(1941:『日本語の特質』育英書院)は、品定め文/物語り文の区別をするが、小論の総称/非総称にはほぼ対応する。
- 3) 「第四種動詞」が常に一テイルを文末で伴うわけではない。例：この薬を飲むとやせるよ；息子は母に似る。cf. 堀口和吉(1977: ~テイル, ~テアルの表現、『日本語・日本文化』6)
- 4) 尾上(1973)のガの三分説によると、小論のいう総称では「眼前描写のガ」は現われない。
- 5) ここで複文については考えていないが、以上で状態とした(5f)を次の例と比較された：明日また彼女が屋上にいるのをみつけたら注意してくれ。この場合は眼前描写ではない。
- 6) この例は、姿をかくすのに手間取っているような状況では進行に近い意味をもつ。cf. 第五節
- 7) 次の二例を参照：(a)彼は一度その大学に行ったことがある；(b)彼はときどきその大学に行くことがある。両方とも構文論的にはかなり近い。(b)は総称だろうか。
- 8) これは「能格性」に関連付けられる。cf. M. A. K. Halliday(1970: Language structure and language function, in *New Horizons in Linguistics*. Penguin.)
- 9) 以下に述べる格文法の視点はないが、宮島達夫(1972:『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版。第一部、六節)を参照。

- 10) もう一つの形「起こる」については考えない。
- 11) この種の発想は次の書物から得た：松下大三郎（1928：『改撰標準日本文法』中文館）；林四郎（1960：『基本文型の研究』明治図書）；南不二男（1974：『現代日本語の構造』大修館）。

（附記）『国語学会秋季大会（1982）』と『筑波大学国語国文学大会（1983）』で口頭発表したものをまとめたものである。林四郎先生をはじめいろいろな方々に御世話になった。御礼を申し上げる。

引用文献

- 金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
- 工藤真由美（1982）シテイル形式の意味記述，『武蔵大学人文学会雑誌』13：5
- 久野 暉（1973）『日本文法研究』大修館。
- 三上 章（1953）『現代語法序説』（復刊1972：くろしお出版）。
- 奥田 靖雄（1977）アスペクトの研究をめぐる——金田一的段階，再収『日本語研究の方法』（1978：むぎ書房）。
- （1978 a, b）アスペクトの研究をめぐる（上/下），『教育国語』53/54
- 尾上 圭介（1973）文核と結文の枠，『言語研究』63